オルフェの遺言ー私に何故と問い給うなー（1960）

LE TESTAMENT D'ORPHEE OU NE ME DEMANDEZ PAS POURQUOI
TESTAMENT OF ORPHEUS

メディア 映画
ジャンル ドラマ
製作国 フランス
色彩 B&W
時間 82分
初公開日 1962/06/01
公開情報 東和

【解説】

「オルフェ」の終幕近い場面から始まる、コクトーの映画による遺書である。コクトーはまず、教授の息子（Ｊ＝Ｐ・レオ）の所に忽然と現れる。父は死んだーーとの返事に、再び姿をかき消して、今度は子供をあやす母のもとへ。戻りすぎてしまった。時空をさまよい続ける詩人には教授の研究が必要なのだ。驚いて子を落とす母。次に詩人が現れたのは車椅子で死期の近い教授。またも進みすぎ。だが、老人が掌中から落とした小箱が彼を、教授の現役時代に運んだ。その小箱の弾丸を撃たれ、詩人の時間旅行は終わったが、その代わり生死の境を彷徨する、セジェスト（「オルフェ」でバイクにはねられ死ぬ詩人）との行脚が始まる。単純だが奥深い逆回しのトリックで死の領域から蘇る様々な事物。燃えた写真、千切り捨てたハイビスカスの花……。「オルフェ」で主人公を助けた死の女王はその地位を追われ、“人を裁く”という最も苦痛に満ちた仕事に就いており、詩人と対面する。自作の絵の前に立つ詩人は、彼を定義しようと試みる少女の姿をかいま見る。手にとった花を描こうとすれば自画像になり、故郷の教会に赴けば尊大ぶったもう一人の自分を見かける。彼はこのあやふやな世界を司る大臣に会おうとして、気が遠くなるほど待たされたあげく、待ち続ける女の武神のヤリに射抜かれ息絶える。が、目をつぶったまま、また彷徨い出し、スフィンクスやオイディプスとすれ違う。そして現在に戻りかけるが、“地上はあなたの居る場所ではない”と言う、セジェストに連れられ消えるのである。詩的イメージを操って“私”映画を作り、他者に理解させるのは難しいことだが、コクトーの表現は遊び心に満ちていて、理屈抜きにその世界で羽を伸ばすことができる。

【クレジット】

監督	ジャン・コクトー	Jean Cocteau
脚本	ジャン・コクトー	Jean Cocteau
撮影	ローラン・ポントワゾー	Roland Pontoiseau
音楽	ジョルジュ・オーリック	Georges Auric
出演	ジャン・コクトー	Jean Cocteau
	エドアール・デルミ	Edouard Dermit
	ユル・ブリンナー	Yul Brynner
	ジャン＝ピエール・レオ	Jean-Pierre Leaud
	フランソワ・ペリエ	Francois Perier
	クローディーヌ・オージェ	Claudine Auger
	マリア・カザレス	Maria Casares
	ニコール・クールセル	Nicole Courcel
	アネット・ヴァディム	Annette Vadim
	シャルル・アズナヴール	Charles Aznavour

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.